

不妊治療の大まかな流れおよび分類

① タイミング療法

月経終了後に経膈超音波で卵胞チェックを行い、排卵日を推測して妊娠しやすい時期をお伝えし、性交渉をもって頂きます。通常は、排卵誘発剤を併用しながら行います。

② 人工授精（別名：子宮内精子注入法）

卵胞チェックを行なって排卵日を推測し、排卵当日と思われる時期に、精液を持参いただき、処理後の精液を子宮の中に注入します。通常は、排卵誘発剤を併用しながら行います。

③ 体外受精

※系列の高崎ARTクリニックで、専門的に行なっております。

経膈超音波に沿わせた針で、卵胞を穿刺・吸引することにより卵子を回収し（採卵）、卵子と精子を出会わせ（媒精）、

体の外で、受精の環境をつくる治療法です。

受精卵を“胚移植”によって、子宮内へ戻します。

※通常は①→③の順にステップアップ（治療法を変更）

していきませんが、不妊症の状況に応じて、一つの治療を行う期間や順番などは、変わることがあります。

(1) 排卵誘発剤（のみ薬）

卵巣を刺激して、卵胞を育てさせるお薬です。

通常、月経3日目から1日1錠を、5日間内服します。

1) レトロゾール

もともとは乳がんの治療薬として開発された、女性ホルモンを抑えるお薬です。その作用により卵胞を育てさせます。クロミッドに比べ、自然周期に近い状態で、卵胞を育てさせます。連続して使用しても、クロミッドによくある副作用がありません。

2) クロミッド

以前から最も頻繁に使用されているお薬です。卵胞を刺激する効果は強く左右に複数個の卵胞が育つ場合があります。（ふたごを含む多胎のリスク）

連続使用により頸管粘液の減少や、子宮内膜が薄くなる場合があります。

（※クロミッドを中止すれば元に戻ります。）

(2) hMG／FSH製剤（注射薬）

のみ薬と同様に、卵巣を刺激して卵胞を育てさせるお薬です。

のみ薬だけでは卵胞の発育が不十分な場合に、

“卵胞チェック”での来院時に、不定期で投与します。

ご自宅で、ご自身で注射を行う製剤もあります。

（※初めて処方する際に、使い方を説明します。）

(3) hCG製剤（注射薬）

排卵を促す作用があり、卵胞が十分に発育した際に使用します。通常、性交渉をもつ日や、人工授精予定日の前日、または前々日に使用します。

